

事業内容、事業の効果に関する写真

（ア）子どもの聴覚検査と聴覚診断



2015 年9月7日（北部ベイトラヒアの診療所）。聴覚検査士を中心とした専門家チームが、ガザ各地で5,000人以上の乳幼児の検査を実施。



2015 年5月19日（ガザ市シジャヤ地区診療所）。耳音響放射検査器（OAE）で検査し、要検査の場合は精密検査へ照会する。



2015年6月18日（ガザ市アトファルナろう学校聴覚検査部門）。聴覚検査で要検査となった乳幼児に、脳波測定による精密検査を行い、聴覚障害の有無の確定判断を行う。



2015 年6月25日（同左）。精密検査は麻酔を使った聴性脳幹反応検査（ABRテスト）で、モニターで両耳の聴覚障害のレベルも判定することができる。



2015 年9月1日（ガザ市アトファルナろう学校）。精密検査で聴覚障害があるとわかった乳幼児には、補聴器を供与した。現地提携団体の専門家が耳型の採取から装着、管理指導、メンテナンスを実施。



2015 年6月30日（南部ラファ地区の診療所）。聴覚検査や精密検査にはソーシャルワーカー（右）が常時同行し、家族に対して精密検査の詳細結果や受けられる支援について説明し、相談に応じた。

（イ）聴覚障害の子どもをもつ家庭へのアウトリーチ型早期介入プログラム



2016年1月25日。早期介入専門家（左）による在宅プログラムで教育活動を実施。母親（右）手作りのノートを用いて、手話も使いながら子どもとコミュニケーションを取る練習。



2016年2月15日。早期支援専門家（右手前）は家庭訪問したソーシャルワーカーからの情報をもとに、在宅で母親への助言指導や相談にのりつつ、子どもとの接し方を示して教える。



2015 年 12 月 2 日（ガザ市アトファルナろう学校早期支援部門）。言語聴覚士による言語療法を話す力を伸ばせると判断された 10 人の子どもに実施。



2015 年 12 月 6 日（同左）。子どもの集中力を考えて 1 回 20 分とし、写真や教材のおもちゃ、パソコンの映像教材などを使った

（ウ）聴覚障害の子どもと親のための集団遊戯療法



2015 年 5 月 16 日（ガザ市アトファルナろう学校早期支援部門）。母親向けの講義は少人数で行い、お互いの経験共有もできるように配慮した。



2016 年 3 月 17 日（同左）。ろうの専門家の存在は母親にとってもロールモデルとなり、聞き取り調査結果では講師に対する高い評価を得た。

（エ）コミュニティにおける啓発ワークショップ



2015年10月6日（ガザ市アトファルナろう学校ホール）。早期支援プログラムに参加する家族からの希望で、人工内耳を含めた聴覚障害に関わる知識についての参加型ワークショップを、言語聴覚士が実施。手話通訳つき。



2015年11月10日（南部ラファ地区地元団体施設）。障害児に焦点をおいた子どもへの虐待について、心理士でソーシャルワーカーの講師が事例を交えて話し、参加者との議論が行われた。手話通訳つき。



2015年12月10日（北部ジャバリヤ・リハビリテーション協会）。早期支援の重要性について講義。参加者からは「家族に反対されたけど心配で、自分一人で子どもの検査に行ったら聴覚障害だとわかった。検査は大切」という経験談が共有された。



2016年2月4日（南部ハンユニスの赤新月社）。子どもの成長と発達についての話を聞いたフルード・ハラフさん（右）は、甥っ子が難聴なので子育てで気をつけることがわかって勉強になったと話す

（オ）聴覚障害の子どもの親や家族のための手話トレーニング



2015年8月26日（ガザ市アトファルナろう学校）。開講した4コースのうち、3コースは母親向けで、修了時にはもっと学びたいという意欲・要望が多かった。



2015年8月19日（同左）。年配の母親はついていけないこともあったが、参加者どうして教えあうなど、母親たちの連帯感も生まれた。



2016年1月20日（同左）。父親向け手話コースも開講。父親の子どもとのコミュニケーション能力・積極性は、参加前後で大きく変わったと講師は評価。



2016年1月27日（同左）。母親や子ども向けの活動はあっても父親向けの活動は少ないので、手話を覚えるだけでなくお互いのことを話せる仲間ができて嬉しいという意見が聞かれた。

（カ）聴覚障害の子どもや家族への在宅ソーシャルワーク



2015年8月18日。初回の家庭訪問で家族から子どもや家庭状況の聞き取りをする早期支援担当のソーシャルワーカー（左）。事後比較ができるよう、子どもの能力発達を測る質問票に記入。



2015年12月13日。2回目以降の家庭訪問では、支援を受け始めてからの変化、家族からの意見や相談を受ける。ソーシャルワーカーは結果を早期支援専門家と共有し、支援計画に反映させる。

（ケ）ガイドラインの作成



活動実績やその知見を活かして、事業終盤に家族向けの早期支援ガイドラインを作成した。活動に参加した家族の復習や、新たに子どもの聴覚障害がわかった家族への手引きとしても活用される。



その他、事業では手話トレーニング用のテキストの開発、集団遊戯及び在宅教育活動用の手話教材やポスターも作成した。受益者への配付だけでなく、啓発用としても今後現地提携団体が使用する。

特定非営利活動法人パレスチナ子どものキャンペーン
聴覚障害の早期発見と支援事業（パレスチナ、ガザ）
完了報告

（キ）早期介入に関するパネルディスカッション（シンポジウム）



2016年3月28日（ガザ市アトファルナろう学校ホール）。事業の受益者、現地関連団体や国際機関の職員が出席。対パレスチナ自治政府日本国政府代表事務所長よりスピーチをいただいた。

シンポジウムでは、事業内容と成果を発表し、参加者に共有するとともに、早期発見と支援の意義について、言語聴覚士や地元の保健分野の専門家が見解を述べた。手話通訳つき。



約20年前にガザのアトファルナろう学校を訪れ、スタッフと交流した愛媛大学教育学部の立入哉教授からは、動画で事業活動に対する助言や、日本の早期発見・支援状況の解説が行われた。

受益者代表として、母親と父親1名ずつから体験談が参加者に共有された。子どもに聴覚障害があるとわかったとき、どんな活動に参加して、どういう変化があったか等、感想と意見が述べられた。

（ク）母親向け早期支援研修



2016年3月16日。各20名ずつ2グループの母親に対して、より専門的な早期支援の知識とスキルを教授し、今後の子育てのみならず、ボランティアとして活動できるよう育成を行った。



2016年3月16日。事業の中で作成した手話の指文字辞書の使い方を研修で行い、家庭でも復習できるようにした。



2016年3月31日。研修最終回では振り返りを行い、参加者の理解度や知識の定着を図った。終了後は評価インタビューによる聞き取りを行い、研修参加で母親どうしの関係が強化され励みになったとの意見が確認された。



2016年3月31日。修了証を手にシャイマ・アブ・カスさんは、夫も手話トレーニングを受けたので夫婦で手話を使って子どもとコミュニケーションを取っていると、話してくれた。